

管内国際理解研究大会 美幌大会 記録

2008. 9. 12分

研究協議内容

講師 上森奈穂美 教諭 (興部町立興部中学校)
授業者 相馬 一之 教諭 (美幌町立美幌小学校)
助言者 長浦 紀華 氏 (網走教育局指導主事)

討議の柱

- ①交流活動を軸にした国際理解教育は、どう進めるか
- ②コミュニケーションをとろうとする態度を身につけさせるための活動を、どのように工夫したらよいか

ワークショップ

上森教諭

ワークショップということで50分の時間を使わせてもらった。二つの内容は時間的に難しいところもあったが、初めての方も多かったようなので、やらせてもらった。

自分は海外で、「外国の人とは違ってあたりまえ」と思っていたが違っていた。同じ日本人でも逆に異文化を感じたりすることもあった。まず自分自身を知る・考える、そして友達のことを大切に感じるのが重要である。アイヌ民族のことなど身近なことから考えることが大切だと感じる。

今日はコミュニケーションということをテーマにパズルをしてもらった。無人島のワークはディスカッションの中で、いろいろと考えてもらえたらということで実施した。

西村校長

地球市民を育む学習をしているが、今日のワークショップが根源にあると思いき、興味をもって参加させてもらった。

アフリカの国境線の話など、高校生や中学生の感じ方の違いなどを教えていただきたい。また20分もかかる作業を、どのようにまとめたのか？過去の経験からお話いただきたい。このようなワークを早速やってみたい。

上森教諭

日本人は日頃、ジェスチャーをあまりしていないと思っているが、実は結構していることに気づいていた。言葉を使って相手に伝えることの重要性を再認識していた。思った以上にメッセージを相手に伝えている。(服装、目、ジェスチャーなど)

時間がかかることについては、あえて苦しい状況で20分かかってもやらせ、達成感や協力する意義などを体験させている。自分の作ったものをくずせるかというのが重要。

アフリカの国境の話など、知識があるかないかにもよるが、高校生くらいになると、水の上流がいいとか、下流がいいとか、世界の話にもっていきやすい。

吉本教諭

自分のものをくずして、相手のことを考えてあげることが重要ということでしたが、相馬教諭の授業でも、自己紹介で英語で話している、子どもも日本語で説明しているなど、

お互いうまくいかないことに気づいていた。そこに共通点があったのではないかと思った。

上森教諭

自分の価値観をくずして、相手を受け入れることが大切なのではないか。簡単なワークであるが、意義はあるのではないか？

公開授業

相馬教諭

子どもたちの様子は、少ししずかになっていて残念。指導計画では月曜に10時間程度になっており、質問を伝える予定だったが、水曜になってしまった。英語で質問される方もいて、翻訳に手間取りながら、またALTに協力していただき今日を迎えられた。交流する人との打ち合わせが全くできなかったのも、こちらの意図も伝えられず、難しさを感じた。日本の文化、折り紙、お手玉を伝えたり、相手の手や体に触れること、近くで見ることなども含め、交流できてよかった。

本校には、以前台湾の子がホームステイしていて、1か月ほど交流した。とても仲良くなり、ジェスチャーなどのコミュニケーションをしていたため、少し自信をもって臨んだようだ。一生懸命頑張っていたように思う。

西村校長

調べたい国や興味のある国の人を呼んだのか？

相馬教諭

呼ぶ人が決定した後、その仲から興味のある国を選んでという流れ。

西村校長

グループ分けの基準は？女子のみとか男子のみとか偏っていたようだが。

相馬教諭

7月の時点で、留学生の来校は決まっていて、美幌小に来られる人は8月に決まった。チェコ、アメリカ、中国、台湾だったが、変更になり、中国、マレーシア、アメリカ、台湾、チェコの国に。その時点で子どものグループを分けたら、また今日のような国の編成となり、結果的に振り回される格好になったので、偏ってしまった。

石橋校長

東京の日本語学校の学生が、国内研修旅行に合わせてホームステイするのに、予定を合わせてもらい来校の運びになった。日本語ができる人、できない人それぞれで、交流も考えていなかった人なので、大変だったと思うが、留学生はよくやってくれた。一発本番で計画していくことは難しいと思うが、子どもたちはよくできていた。

交流の場は日常ではほとんどないので、こういう機会を作ってみるのもいい。ぜひ各校でもやってみてほしい。

今後の授業の中で、今日来校された方の国の名前が出てくることもあると思うが、その時は今回の学習が生きてくると思うし、生かしてもらいたい。今後に期待している。

稲垣教諭

子どもたちは楽しそうに交流し、満足していたようだ。指導計画の中には、会う前に調べたい国を調べているようだが、範囲みたいなのは？どんなことを調べたのか？今日の準備は具体的にはどんなものか？

相馬教諭

国の決め方は、美幌の推進委から来る人の国を聞き、その国の中で興味のある国、調べたい国のアンケートをとり、何人かずつ集まり調べ学習をした。

国は聞いたことがあるが、どんな文化で生活をしているのかはよくわからなかったようだ。事前のオリエンテーションの時、異文化の人が来たらどんな話をするか考えてみようという指導した。服のこと、食べ物、遺産、音楽のことを、本やインターネットで調べ、ポスターにまとめて発表した。身近なことから質問を考え準備してきた。

日本のことを伝えたいということから、けん玉、あやとりなどを教えることになり、そちらも準備を進めてきた。折り紙の折れない子に教えることで練習をして今日を迎えた。

稲垣教諭

15時間でうまくいったのか？

相馬教諭

1時間はオーバーしたが、ALTに協力していただき、練習させてもらった。

齋教諭

長い指導計画があって、今日があっただのだからと思いつきながら見せていただいた。これからどうまとめていくのか？

相馬教諭

中国の子と日本の子が仲良くやってほしいという、中国の人の話から、世界の人と仲良くしていくことを伝えていきたい。

齋教諭

お互いの人を知るところを、先生なりにどう伝えていくのか？アイディアは？

相馬教諭

今日の人は器用だったけど、みんながそうではないということを伝えていきたい。個人名で考えた方がよい。

本沢教諭

準備の中で英語の練習もあったと思うが、初対面の人と距離がどんどん近くなることに感動した。子どもの中から「意外にお手玉が上手」など子どもの中にある種のイメージができてきているような様子があったが。

相馬教諭

チェコ、アメリカは知っているが、どんな国かは知らない。新聞とかで中国の様子を知り、少しは思い込みがあったかもしれないが、オリンピックが開催されていたことで、悪いイメージは払拭できていたようだ。知っていることはあまりない中での交流になった。

長浦指導主事

小学校の異文化理解、異文化体験の中での日本の伝統文化を伝えるというプログラムだった。自分の国の遊びを調べてきた。伝統文化の理解につながるだろう。

45分1本勝負。初めての人と出会う交流の場面では、最初はかたいもの。アイスブレイクを取り入れるとよかった。

ねらいは何だったのか？子どもには「いっぱい交流をして、仲良くなろう」がめあてであり、指導計画では「自分の伝えたいことを伝える」ことがメインだったのでは。では、子どもにもそのようなめあてにした方が明確ではないか。

交流することが目的ではなく、コミュニケーション能力の育成、伝統文化の理解だ。成功したと思ったのは、ある男の子が「自分たちと同じだ」という気づきがあったこと。違いに気づくことも大事だが、同じだと気づくことも大事。共生という意識が見られた。

「〇〇の国の方が」という言い方ではなく、個人名でお話できる方が望ましい。そういう子の育成を目指したい。国名と国旗の表示も理解の一つの手立て。総合的な学習の時間では、探究的な色も濃くなってきている。

留学生の方には、自国の遊びを一つでも紹介していただけたらよかったです。

パネルディスカッション

パネラー	佐々木寿彦	教諭	(上湧別町立開盛小学校)
	吉本 隆	教諭	(大空町立女満別小学校)
	池田 潤	教諭	(網走市立網走小学校)
	倉田 忠彦	教諭	(西興部村立西興部中学校)
助言者	長浦 紀華	氏	(網走教育局指導主事)

「英語活動はこう進めよう」

司会者

英語活動が今まさに始まるというところだが、温度差がある中、一番最初に何から始めればいいのか。授業のイメージは？カリキュラムはどう作る？どんなところに行ったらいいのか？

吉本教諭

校内の組織をはっきりさせた。EPT (English Project Team) を4人位で組織。計画・実行・他の先生方と見る・検証・評価・指導計画の見直しという流れ。先生方で英語の研修を行う。EPTで通信を作って、校内で知らせるなど。

池田教諭

先生方で持ち寄ったカリキュラムでは統一性がないので、一冊の本をベースとしてアレンジしていくようにした。まずいろいろな授業を見た。たくさんの学校に足を運ぶ行動力、見てもらって意見をもらうことも必要。

司会者

英語が苦手な先生が教えるにあたって、どういうふうにしていけば？

佐々木教諭

他の先生がやっているものをまず見た。複式だったので、もう一人の担任の授業を見させてもらった。ALTが職員のために、英会話教室を開いてくれたので、耳を慣らすことができた。TVの英会話を見るなど、追いつくようにしてきた。

櫻田教頭

みんなで作っていくことや、0から始めることははっきりしているが、3・4年生のつながりはどうなるのかが心配。中学校とのつながりも不透明であり、中学校の前では何をしておけばよいのか、このねらいで本当にいいのか不安。今の総合をどうやっていくのか。

佐々木教諭

これからのことなので、今はまだ進んでいない。

吉本教諭

英語ノートを使うことになる。英語活動を総合でやってきたものとしては戸惑う。今後推進していかなければならないと思っているが、疑問も出ている。

長浦指導主事

スキルの習得になるのは、「総合」的ではない。英会話学習、パターン学習はふさわしくないということ。語学の習得はねらいが異なる。総合的な学習の時間のねらいに沿った国際理解には問題がない。

櫻田教頭

よくわかるが、慣れ親しむのは小さい頃から行っている。発音に関してはどうか。

長浦指導主事

5・6年段階では、正確な発音は求められていない。

高柳校長

慣れ親しむ活動というのは、1～4年生でもやっている。3・4年生の位置づけは。

長浦指導主事

「慣れ親しむ」は5・6年生の目標の一つ。外国語活動が総合からはずれるのは、主旨が違うから。

司会者

中学校からの視点は？どうつながってほしいのか。まだやらないでほしいことなど。

倉田教諭

主観的な話だと、小と中の兼ね合いの部分で悩みがある。小泉小のアンケートの中の「小学校での英語活動が中学校で役に立っているか」で4割が役に立っていないという結果に心苦しさを感じる。英語ノートは中学校1～2年の内容。大丈夫か心配になる。今後は単語を厳選し、いくつか教えていくといい。

司会者

中学校としての意見は？

西村校長

アンケートの結果では、書くことが7割難しい、書くことが楽しい3割。単語を書く学習とかが小学校であったのか。新出単語を書くことはどのくらいあったのか？

池田教諭

書くというものは一切なかった。掲示物の中で絵の下にローマ字で表記することはさりげなくある。

佐々木教諭

開盛もない。絵の下には入れているが、指導の意味合いはない。

西村校長

それで書くことは大変だったのかもしれない。成績はよかったのも、その下地は小学校によるものが大きい。

菅原教頭

これから英語を始める先生も多い。英語ノートの訂正版がこれから配られたり、教科書のようになれば、中1程度の内容ともなれば英語嫌いを生むのでは。

アクティビティーを活用して、必要感を生み出すのは、総合での交流・調べ活動の学習だろう。総合と英語活動はリンクさせるべきであろうと思う。

高柳校長

小学校の英語の研究会に参加した時、会話中心で文法的に難しいことをやっていた。小学校と中学校で気をつけることは？

倉田教諭

英語嫌いはライティングから始まる。正確に書くことにプレッシャーを感じるからだ。文法を気にせず、慣れることが大切ではないか。

吉本教諭

必要感をどこで生みだしたらよいかと考えた時、やはり総合か。英語であるから体験であり、習得することではないのであるから、英語を使うが、友達と伝えあうことの喜びを感じることで意義があると思う。

佐々木教諭

いろんなところに必要感がちりばめられていればよい。

長浦指導主事

(別紙による資料を説明しつつ進められたため、詳細は割愛し、概略のみとさせていただきます)

慣れ親しむことが目的ではなく、言語・文化理解・積極的なコミュニケーションの際に英語をツールとして使用し、慣れ親しんでいく。文法は重要ではなく、SVO程度。英会

話、パターンプラクティス、ダイアログは外国語活動の目標に合致しない。

アルファベット程度の理解を。「〇〇できる」が評価の対象ではなく、「〇〇しようとしている」になる。

小学校では読む・書くは入らない。話す・聞くが重要であり、コミュニケーション能力の素地を培うことが大切。一人ひとりが解説を読むことから始めてほしい。ダウンロードして各自が持つこと大切。

高柳校長

英語ノートを必ず使うということではないのか。

長浦指導主事

使いなさいということではないが、使わないなら説明責任が求められる。